風の剥製・肆

根岸一之

わが畏友古山正雄氏にこの句集を献ず

寺山修司はどこかで、俳句は滅びゆく文藝であるという意味のことを書いている。その文章は、なぜ寺山が一時的にではあるものの、俳句に熱中したかの弁明のような文章であった。しかし、それはともかく、その寺山一流の「滅びの美学」に魅せられて、すでにほぼ三十年が経過した。そして、俳句に深く関わるにしたがって、日本語という言語の戦慄すべき「魔術的」性能に気づかされたりもした。

ここら辺りで、数冊の私家版の句集に纏めておこうと思いついたのは、ごく最近のことである。現実世界に眼を移せば、当たり前に出版できたとしても、そのような「滅びゆく文藝」には、多数の読者を獲得出来る術もない。とすれば、何時か誰かが発掘するまでの数百年を、電脳の海に沈めておくべしと決意し、ここにそれを行うことにする。

熾天使の吐息

序：風の記憶、日々の音

季節のあわいに立ち止まり、著者が丁寧に拾い上げる言葉たちは、どれもみな瑞々しい光を放っている。そこに漂っているものは、見過ごしてしまいそうな小さな命の鼓動や、儚い空の色、通り過ぎる風の匂いなどである。著者が行ってきたのは、俳句という十七音の極限的に限られた言葉の器の中に、無限に広がる情景が鮮やかに凝縮しようとする作業であった。

一句を紐解くたび、忘れていた心の琴線に触れ、日常がささやかな奇跡の連続であることを思い出す。静謐でありながらも力強い眼差しは、読む者の心に深く染み入り、温かな余韻を残してやまない。この句集が、読者にとっての「心の栞」となることを願って止まない。移ろいゆく時のなかで、永遠に変わることのない美しさがここにある。

目次

ネヴァアランドにて ——07
忘却に紅を ——17
曠野へ ——27
エウレカの鸚鵡 ——37
薔薇の名前あるいは黙示録 ——47
黒の回帰 ——57
朱をさす ——67
水葬への階梯 ——77

ネヴァアランドにて

狂王の庭の朝明け鳥渡る

春愁やネヴァアランドを白む空

紅に蕊（しべ）まで濡れて罌粟の花

密室に謎を据ゑたる雛（ひひな）かな

満月や古地圖に砂丘ある如く

水銀柱見詰め續ける大暑かな

しんしんと硝子の雪の降る痛み

熾天使（セラフィム）の吐息は凍（い）てし金木犀

トーストの焼ける匂ひや今朝の秋

忘却に紅を

神の子の象（かたち）に揚羽展翅せり

散る櫻わが身の記憶棄つる風

春疾風（はるはやて）五時の始発の汽車を待つ

菜の花の解體新書の栞かな

梅雨明やもつとも高い聲を出す

炎帝や碧眼僧の過ぐるのみ

佐保川の櫻に紅をひとしづく

ちさきもの抱(いだ)き眠るや利休の忌

風を受け忽ち割るる石鹸玉

曠野へ

朧夜を濾しきれざるは砂時計

煤拂ふ位牌のうらに杢目かな

ベラドンナ喪失といふ夜の瑕

向日葵や南中刻の影を喰ふ

デラシネや無残に枯るる水中花

奈良卦町振り向きざまの鎌鼬

寒卵幾何學的にいざ生きめ

野遊（のあそび）や棒一本の嘘を吐く

雪が降るわたしの曠野へ降り積もる

エウレカの鸚鵡

薔薇深紅　奥処（おくか）にひそむ刺客かな

雪の夜や香り殺めて白の底

山鳥頭伽藍の壁の崩るる夜

（とりかぶと）

麦秋の空にゴッホの鴉かな

鯉幟哀しいまでに晴れにけり

罌粟の花ゲームのごとき虚構（うきょ）かな

半夏雨（はんげう）や鱗（お）の生ゆる日の記憶

夏の夜の寝汗の芯に針の夢

（エウレカ！）と叫べ鸚鵡の言葉にて

薔薇の名前、あるいは黙示録

ゴルゴタの蝶を釘打つ夜明けかな

花冷や世界のをはりのやうな寺

野良犬の牙の濕りや皐月闇

武者人形匣の中身はまたも匣

葉櫻や花の死後降る花の雨

ラストワルツ聴きつつ潰す蛇苺

廊下より廊下の湧ける朧かな

澪（みぞ）るるや静かに炎ゆる金閣寺

圖書舘の薔薇の名前を冬銀河

黒の回帰（リフレイン）

梅月夜浮世めぐりの至福かな

珈琲に地獄溶けゆく十二月

椿落ち土に還るといふ定理

やはらき吐息ももいろ春の雷

千億の夜を号（おら）びて初櫻

寒の月毬藻に毬藻重なりて

偶（たまさ）かに生承くものや流し雛

如月の夜明けの水の昏（くら）き底

水無月の町に草むす甍かな

朱(あか)きをさす

遠雷や空き地に漆黒（くろ）きドラム罐

最果てや摩滅の句碑に霜柱

蝸牛渦巻く過去の咎の數

夏日蔭肉の襞なす紙人形

海酸漿無數の惡夢飼ひにけり

聖堂の異形の薔薇の屍骸かな

朝曇ミルクの底に沈む黒

暮れ泥(なづ)む躑躅の蜜の甘かりき

透明なゼリーに朱（あか）さすデギタリス

水葬への階梯

居心地の悪き座蒲團春隣

儀式として貝の殻割る二月盡

麗らかやポストばかりの竝ぶ舗道（みち）

一列は菜の花漬の黄色のみ

水平にたゆたふものに春霞

青空に賣繪を架くる櫻かな

だしぬけに鸚哥の放つサクラサク

春風や心を病みし王女の忌

朧夜や書架に「水葬物語」